



「新版 雪氷辞典」
 公益社団法人 日本雪氷学会 編
 古今書院, 2014年3月
 315頁, 3,500円 (本体価格)
 ISBN 978-4-7722-4173-1

いきなり私事で恐縮であるが、先日自動観測された積雪深データを眺める機会があり、数時間で不連続に積雪深が増加している事例が見つかった。何が起きたのか気になったので、現場で自動撮影された写真を確認すると、風によって形成されたような雪面模様が判別できた。ここで本書「新版 雪氷辞典」の出番である。「雪面模様」と調べると、写真付きでサスツルギ(吹雪の削剥域あるいは風による削剥で風上側に鋭い先端を持つ模様)が紹介されているではないか。現場の風のデータを調べると確かに風速が大きい。降雪がなくても積雪深データが擬似的に増加するからくりが見えてきた。ついでにその観測データをある再解析データの積雪データと比較してみたら、季節が進行するとともに観測値より過大評価する傾向があることが分かった。これは「圧密」の効果が考慮されていないために引き起こされたものだと後々分かったが、そうすると「圧密」とはそもそもどういう定義なのか? 「積雪深」と「降雪深」の違いは? など辞典を手にする二次的な調べ物が止まらない。webで調べればそれらしい解説はすぐに入手できる時代ではあるが、日本雪氷学会が編集しているこの一冊が手元にあると安心だ。

専門用語は時間の経過と共に新しいものが増えてくる。本書は1990年版「雪氷辞典」の改訂版とも言うべき「新版 雪氷辞典」である。したがって1990年以降に生じた重大な出来事、新知見などがちりばめられて

いるようである。「まえがき」には取り扱い項目数が5割(1594語)も増加したと記載されている。できればどこが新しくなったのか印を付けてほしかったが、「平成18年豪雪」は確実に新しい用語として取り入れられたものであろう。ここ数年グリーンランド氷床の融解に影響を与えているとされる「クリオコナイト」もそうであろう。あとは、ページをばらばらめくっていると宇宙に関する用語や写真が目につく。この24年間で目覚ましい進展を遂げた分野であることを象徴している。

付録の大雪に関する警報基準も興味深い。気象庁が発表する大雪警報基準として、新潟市は6時間降雪の深さが30 cmなのに対し、東京は24時間降雪の深さが20 cmとなっており、如何に東京が雪に脆い都市であるかが分かる。気象庁のホームページの深い部分を覗けばきっと出てくる情報だとは思いますが、特に近年は従来にも増して豪雪の年が頻発しており、こうして県別に紙媒体ですぐに確認できるのは有用かもしれない。

辞典の作成には多大な時間が必要であるとともに、多数の研究者のインプットが必要不可欠である。特に後者においては、24年間分の雪氷分野の新知見と技術が本書に凝縮されている。数値モデルや再解析データが精緻化される昨今、雪氷分野の扱いも一段と細分化されるようになってきた。降雪、積雪、アルベド、海水、氷床、雲微物理過程など気候学的に極めて重要なパラメータは、限られた雪氷観測データをもとに開発されたパラメタリゼーションに依存している。現場観測を中心に得られた情報が濃縮されている本書は、雪氷学の専門家だけではなく、気候モデルの開発者などにも利用価値がある一冊である。

(国立極地研究所 猪上 淳)